

2017年10月29日(日)

説教:「問うこと、問われること」

聖書:ヨブ記42:1~16

ヨブ記は、人間の苦難の原因はどこにあるのかと問う。全ての苦しみは、人間の罪の結果なのか?この問いは、今の私たちにも問いかける。

ヨハネ福音書 9 章に「生まれつきの盲人をいやす」話がある。そこで問われていることは、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と問う。病の原因を罪による罰であると決めつける。世間一般的な考えであろう。その問いにイエスは「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない」とお答えになった。この答えは慰めに満ちていよう。どんなに当の本人やそのご両親が悩んでおられることか。病に苦しむ以上に、この社会の在り方に心痛んでいたのかと思う。イエスは全ての苦しみは人間の罪の結果ではないことを、はっきりとおっしゃっておられる。

ヨブ記 42 章はヨブの悔い改めの言葉が記されている。これまで自分で理解しようとし、苦難の意味を神に「問い」続けた。しかし、神から逆に「問われる」ことで、ヨブは自身が抱えていた「苦難」の問題について解決の道が与えられて行く。この神から「問われる」という経験は、ヨブにとって神との新たな出会いとなって行く。《塵と灰の上に伏し》とは、いわゆる悔い改めを意味するが、「塵」とは、創世記 2 章 7 節に出て来る《主なる神は、土の塵で人を形づくり》と言う《塵》のこと。神に創られた者、塵に過ぎない者であるという悔い改めを意味する。

この物語の最後は全てが回復するようにして終わる。最後は“めでたし、めでたし”で終わるといふことか?このヨブ記の難しさがここにある。10 人の子どもが奪われ、10 人の子どもが与えられるが、失われた悲しみは、埋めることは出来ないはずだ。10 節に《…主はヨブを元の境遇に戻し、更に財産を二倍にされた》とある。これはヨブの境遇が全く元通りになったということではない。財産は二倍になったのに子どもは同数。人の命は、単純に倍与えられれば、祝福も倍になるということではない。つまり、「取られた命」も「与えられた命」も、どちらも等しいものであることを示している。子どもの数は同数であるところに「命」の尊さを示している。

ヨブ記は、人は神に「問うこと」が赦されていると教える。そして同時に、人は神に「問われること」の大切さを教えている。私たちは直接、神に「問うこと、問われること」の大切さをこのヨブ記から教えられて行きたい。(神谷)